

儒学論集

儒学文化 第3号

巻頭言

儒学と平和経済学について

学校法人昌平黌 理事長

儒学文化研究所 所長

田久孝翁

申し上げるまでもなく、儒学は2550年もの歳月を要して東洋の哲学として発展し、今日では世界の至る所にその名を博している世界的文学であり思想史でもあります。特に東南アジア一帯に及ぼす影響力の大きいことは、言を待たないところであります。

而して儒学（論語）は単なる文学に止まらず理化学の上でも、思想史の面でも多用な影響力を持っています。中でも朱子学は天の理、地の理、人の和に通じ、「理気二元論」を唱え、陰陽五行の法則に従って森羅万象に及ぼす現代型自然環境の大切さを説いており、儒学本来の精神であるとともに、精神文明の基本であり、仁義礼知信、人道、忠恕（真心）等万物の霊長たる人間社会の基本を説いているのであります。斯くして人間社会の基本は「仁」であり、人が二人、相對する人間が二人、これが最低限の社会であり即、愛の原点、道徳の基本であると説いているのです。相對する人間が二人、上下左右前後に続く人間が二人、それが社会の基本であることは現代人としては当然のことではありますが、2550年前のその昔、「長幼の序」上下左右人の道、義理人情の世界を説いているのが、「義」の世界であります。紀元前330年代孟子の説による義は、人間社会の要として、仁の後に続く人の道とは、義なくして上下左右の人間関係は保たれないことを説いているのであります。時間が経つに従って仁義の心は人々（人間社会）の常識となって、論語及び孔孟の教え、即、仁義の社会が罷り通る時代となるのであります。

仍って、来る人間社会の営みを支える物々交換の時代から今日のマネー社会に発展する過程にあって、求められる商人道は即ち（義商）の姿であります。社会発展に伴って求められる商人道・義商の存在は益々高く評価されて行く中国に於ける義商として上げられるのは、中原の古都安徽省に見る（徽商）の存在であり、日本の堺、近江の商人道がそれです。

近代社会に発展した経済界はとかく、近代経済学又はマルクス経済学等に発展する時代的背景とともに、イデオロギー的、思想的、強いては戦争経済に埋没するようになってるのが現代経済の実体ではないでしょうか。このままでは60億にも膨れ上がった地球上の全ての人口は、今や覇権主義国家群の餌食となるやも知れない運命にさらされていることを思うとき、正に「経世済民」、世を治め民を救えの譬えの通り、2550余年の昔に立ち返り、

経済社会の在り方を見直す、それが平和経済学であり、世界各国、各民族の生き方を保障することが儒学の精神であるところの修己治人の精神であります。それは強いては平和経済学の精神でもあることをここに申し上げ、儒学と平和経済学は不離一体の真理であることを重ねて申し上げ、各位の喚起を促す次第であります。